

日時 令和6年4月20日(土)

午前9時～正午

場所 松本市役所3階 第1応接室

～ 議事概要 ～

■会議事項

1 森林長期ビジョンの素案について

メインテーマ(案: 暮らしのなかに、森林とのふれあい、木のぬくもりがある街 matsumoto を目指して)

- 以下のような意見やイメージが出された。
 - 松本市の都市の中心に森林を位置付ける(街と森を近付ける、わざわざ出向かなくても街の中に森がある、都市での林業など)。
 - クラフトだけではなく、暮らしの色々な場面で森林と繋がり松本で産出された木を利用する。
 - 市民が地元産材に興味・関心を持ち、暮らしの中で当たり前のように利用する(地産地消: 市内で生産して消費する → 林業のあり方も変わってくる)。
 - シームレスに森林が街の中に存在する。
 - 文字で表現するだけでなく、イラストや写真でも伝える(松本をイラストで表現する際は、周辺を森林で囲まれその中に街がある、森林と街との距離感が近いイメージが伝わるとよい。他市町村のビジョンによくある出口に海があるようなイメージは松本には当てはまらない。ひと目見て松本だと分かる実際の位置関係がイメージしやすいイラストの方がよい)。
 - 「〇〇な森づくり」ではなく「森づくりによって暮らしが〇〇になった」というふうに、暮らしの方に焦点を当てた方がよい。
- 以下のようなメインテーマの案も出された。
 - 「森林都市松本」、「暮らしと森林が共存する豊かな湧水の街松本」、「どこにいても木陰のある街」、「森のめぐみに満たされ暮らしつづける街づくり松本」「Green Forest City 松本」

テーマ①～⑤全体

- テーマ区分は必ずしも5つでなくてもよいが、漏れているものがあるのはよくない。現時点ではこのテーマ設定で漏れはないと思われる。市民の誰がビジョンを目にしても「自分が仲間外れにされていない」と思えるような網羅的な設定がよい。
- 最初に決めたテーマが絶対的なものではなく、今後ビジョンを推し進めていく中で状況に応じてその都度最適なものに更新していくような流れがよい。

テーマ① 市民の暮らしの中に、森林とのふれあいを

- 森林に入っていくための遊歩道のモデル作りに取り組んでみてはどうか。

- 森林と農業との繋がりの要素も盛り込みたい。

テーマ② 市民のくらしのなかに、地域の木材を

- 事業者の視点だけでなく個人の視点も盛り込んだ方がよい。
- 事業者、所有者、市民を繋ぐ仕組みを取り入れたい。
- 製材業者がいないとクラフトや日常生活の木の利用も難しい。製材業者の存在は地産地消の要になってくると思われる。

テーマ③ (観光利用)

- 現時点では検討のための情報が少なく、まず現状を知る必要がある。
- 奥山では主に登山などによる観光が確立しているが、里山での観光が確立していないと思われる。例えば、里山の登山ルートや里山ガイドを整備するといった取り組みが考えられる。
- 現状ですすでにある木陰スポットを発掘したり、新たなスポットを創出してみてもどうか。森林浴ができるような場所は観光客にも人気が高い。

テーマ④ 市民のくらしを支える森を守る

- 松枯れに不安を抱く市民が多いことから、松枯れ後の森林回復のイメージを分かりやすく伝え不安を払拭してもらうことが大切。
- 森林所有者へのケア（山が荒れることへの対応）も重要。

テーマ⑤ 森を知って、森を育てる

- 指導者の人材が不足している。学校（教師）のほか博物館（学芸員）、NPO など継続的に取り組める人材を確保することが重要。
- 相談窓口があるとよい（例：伊那市のミドリナ委員会）。

2 フォーラムについて

- 日時：6月22日（土）13～16時
- 場所：浅間温泉文化センター
- 内容：○ビジョン（案）の説明
 - 市民から主にアクションプラン（取り組み内容）について意見を聴く。○森林イベントのプレゼン大会
 - 市民から森林でのイベント企画を募集し、プレゼン大会を開催する。
 - 次世代を担う大学生や高校生にも声掛けをする。
 - 運営委員の審査により選出された企画については、フォーラム後に令和6年度のイベントとしてビジョンの試験運用的に実施する。

3 今後のスケジュールについて

- ビジョンの実施体制については、常設が可能な窓口機関を設置することが望ましいのではないか。具体的な形についてはフォーラム後の検討になると思われる。
- 次回の運営委員会は5月最終週～6月第1週で調整を図る。主にはフォーラムに向けてビジョン（案）の内容を最終的に固めることとする。

議事録要約

1 委員長あいさつ

(三木委員長)

今回はビジョンのメインテーマはじめ、内容をより良いものへと詰めていきたい。長時間の会議となるがご協力願いたい。

2 会議事項

(1) 森林長期ビジョンの素案について

(三木委員長)

メインテーマからまずご意見を伺いたい。

(永原委員)

「森林都市松本」

(渡辺委員)

「クラフトの街まつもと」「くらしや湧き水を豊かにする森林づくり・街づくり」

“くらし”と“豊か”の2つのキーワードは入れたい。森林は林業事業者が対象とするだけではなく、くらしの中での森林でありたい。また、クラフトと湧き水は昔から松本と深い関わり合いがあると思っている。ただ、クラフトを強調しすぎると市街地以外の市民が疎外感を感じる可能性はある。それから、森林づくりと街づくりがシームレスに繋がると良い。

(永原委員)

くらしと森を近付けるニュアンスはあって良いと思う。生活の中に自然に森林がある、あるいは、森林の中に都市機能があるイメージを表現できると良い。

(環境アセスメントセンター)

松本市ならではの特徴を表現する場合、市民と森林との繋がり観点からまとめ、木を生活の様々な場面で活用するイメージや表現を盛り込めると良いのではないかと考えている。

(市)

「くらしと森林が共存する豊かな湧水の街松本」

(香山委員)

ビジョンで森林に関する全てをカバーする必要はない。このビジョンは行政向けではなく市民向けであり、市民と森林との繋がり、シームレスに森林の中に街がある感じ、市民が森林を“いいな”と思える表現やトーンで、ビジョン全体を統一することが大切である。

(三木委員長)

“森林づくり”や“街づくり”も大切だが行政的な感じがしてしまう。それよりも“松本市民

はこういう暮らしをする”といったイメージを打ち出したほうが良いだろう。つくるのは“森林”や“街”ではなく“暮らし”ではないだろうか。

(永原委員)

わざわざ出向かなくても街なかの至る所に森林が感じられる、繋がっている感じか。

(三木委員長)

実際には、今でも市民が容易に森林に入るとは可能なのだが、制度的なハードル以上に心理的なハードルのほうが先に邪魔をしているのかもしれない。

(大田副委員長)

地方都市である松本は都市部と比べて森林との距離感が近いと、地域の木材を使用することなどに対する恩恵をもっと感じられる街になっていけると良い。

(香山委員)

安曇地域や奈川地域の市民は、「松本市内ではあるが、実質は松本市外である」という感覚かもしれない。合併で後から松本市となった地区の市民も、自分ごととして捉えられるような感覚を醸成することが必要である。

(三木委員長)

最終的には“暮らし”を目指すという気がしている。ビジョンを作成した後も市役所に任せるのではなく、市民自身がビジョンの実現に向けて取り組んでいく姿勢が重要と理解している。そういった姿勢がメインテーマで表現できると良い。

(香山委員)

市民が自ら森林再生に対して取り組みたくなるような視点で、ビジョンの内容を詰めていけると良い。

(小穴委員)

近所付き合いと同じような感覚で取り組めると良い。

(三木委員長)

“クラフト”というと“クラフトフェア”のイメージが強い。“クラフトフェア”ではなく、このビジョンで示したい“クラフト”として表現できると良い。

(香山委員)

森林と街の境目がない（シームレスな）状態をイラストでも表現できると良い。ビジュアルはとても大切である。「Green Forest City 松本」といったような表現も一案かもしれない。

(環境アセスメントセンター)

メインテーマの案を考える際も、シームレスな状態、都市の雰囲気、森林との距離感が近い感覚を盛り込めればよいと思い作成した。

(永原委員)

「どこにいても木陰のある街」というのはどうだろうか。夏は涼しく冬は暖かい感覚も合わせて伝わるか。

(香山委員)

「都市林業」のイメージに近いか。現状では無理だが、将来世代においては普通に都市の中で林業が行われているのも興味深い。

(三木委員長)

他事例を上げると、仙台市は街路樹の整備で有名である。その街路樹の中で様々なイベントも行われていたりする。熊本市では、路面電車の線路が全て芝生で覆われていたりする。東京でも最近では「都市養蜂」といって、ビル街でミツバチを飼ってはちみつを採取したりしている。

(永原委員)

今までは街なかに大木があると邪魔扱いされた。この逆の発想の街づくりが大切なのでは。

(香山委員)

平均化ではなくグラデーションが大切だと思う。すぐに実現することは難しくても、ビジョンでは将来に向かっての具体的な方個性を示すことがとても大切である。

(渡辺委員)

松本産材が身近にあるくらしにしたい。生産者・消費者両方の立場の市民が誇りを持って松本産材を活用し、くらしの中に溶け込んでいるような状態を目指せると良い。伊那市では「循環」ということを大切にしている。

(香山委員)

そういうくらしが軌道に乗っていくと林業も変わって行って、伐採した木材を市外へ出すことが前提ではなくなる。ただ、昔を振り返ってみると、地元で木材生産して地元で活用するという循環が松本には存在した。ビジョンとして表現する場合も、洒落た言葉ではなく土着的な表現でも全然問題ないと思われる。

(市)

まとめてみると、「森の恵みに満たされくらし続ける街づくり」というのはどうか。

(環境アセスメントセンター)

相模原市のビジョンでは、目指す森林の将来像を表現していて、この松本市版のような形で市民の声を活かしながら考えていけると良いのではないだろうか。松本市は他事例によくある「〇〇の森づくり」ではなく、「〇〇の状態になった松本を目指す」といった方向性が良いのではないだろうか。

(三木委員長)

いくつかフレーズや単語を出していただいた。今後はこれらを上手く組み替え、たたき台を作りたい。

(渡辺委員)

フォーラムの前には、そのたたき台を確認する場を設けたい。

(香山委員)

いくつかビジョンの他事例を見た時に、山があつて川が流れて海に繋がるというステレオタイプ的なイラストが描かれている。これに対して松本は、山の中に都市があり、出口に海があるタイプの都市ではないため、松本ならではの特徴を示すイラストが欲しい。

(三木委員長)

その場合、松本以外の地域にもあてはなるような一般的・概念的なイラストではなく、ひと目見て誰もが松本市と想起できるイラストが良い。イラストには、文章にはない直感的にイメージを伝えられる強みがある。

素案では5つのテーマで区分しているが、これで良いか。この5つのテーマ以外に含まれる要素がないかどうかご意見頂きたい。漏れてしまうものがあると困る。

(香山委員)

強弱はあると思うが、項目はこれで網羅されているのではないだろうか。観光については、他の4つのテーマに分散できるかもしれない。

(環境アセスメントセンター)

森林を観光資源として活用するのは松本市の大きな特徴の一つではないかと考えこのような区分とした。また、くらしと観光に必要な森林の姿は異なるのではないかと思い、観光を1つのテーマとして設定してみた。

(香山委員)

ビジョンが完成し運用していく段階になっていくと、スピノフ的に新たに取り組まなければならない内容や課題が派生してくると想像できる。そういった状況が発生することを見越して、今からビジョンを運用していく仕組みや組織を考えた方が戦略的である。また、ビジョンに対するレスポンスが常に発生し、それに対応していくようにすれば、ビジョンは常に機能し

更新し続けることになり、最初の段階から完璧な内容を目指す必要もないと思われる。

(三木委員長)

「観光」として独立してテーマ設定しているのは問題ないと思うが、現状では書ける内容が出揃っていない。まず具体的なニーズを把握することが必要か。

また、すでに地域の中で取り組まれている取り組みについてビジョンで紹介していくのも効果的ではないだろうか。

ここからは5つのテーマごとに皆さんからご意見を頂きたい。

テーマ①：市民の暮らしの中に、森林とのふれあいを

(大田副委員長)

アクションプランにある遊歩道の整備については、業者が整備するだけでなく市民の協力も得ながら進められると良い。関わった市民にとっては森林に入る実感や遊歩道の有難味もより分かるのではないだろうか。ウッドチップを利用したり木陰も多く創出できたりすると良い。

(香山委員)

景観への配慮や維持管理方法の検討など、遊歩道を整備することによる波及効果にも期待したい。遊歩道整備のモデルプランのようなものが作れたら面白い。また、新たに遊歩道を整備するだけでなく、整備されたものの現在では利用されなくなった遊歩道を発掘する取り組みも有効であろう。

(渡辺委員)

子ども達が森林に触れられる機会を設けたい。親世代が森林と触れ合った経験が少ないため、子ども達に伝えられない現状がある。親世代も含めて触れ合えとなお良い。車で1時間以内の場所に森林環境が多く存在する松本の立地環境を活かしたい。学校の授業で体験するのであれば、教育委員会からの援助も必要か。

(香山委員)

例えば焼畑など森林と農業との繋がりにも触れたい。松本市でも柳沢林業などすでにこの分野で取り組んでいる事例はある。

(永原委員)

養蚕もその一環か。

(三木委員長)

南箕輪村では、森林に生育している樹木の苗や実生を家に持ち帰って育て、大きくなったら植樹するという取り組みも行っている。

テーマ②：市民の暮らしのなかに、地域の木材を

(永原委員)

事業者だけでなく個人も入れた方が良い。

(香山委員)

市内に多くの製材業者（事業者）があり、それぞれの製材業者が松本の森林と繋がっているという状況が理想的である。市民が森林に入って木を伐り出して製材するのは事実上不可能であるため、所有者、事業者、市民の3者がうまく繋がるような仕組みや関係性になると良い。現状では数は少ないものの松本にも製材業者は存在するが、市民とは全く繋がっていない。

(三木委員長)

地域産材を製材する業者がいなければ、クラフトを盛り上げていくことも難しい。

(香山委員)

製材した木材をクラフトとして使用できる形に加工できる業者も必要で、松本市ではこの業者が完全に絶えてしまっているのが、クラフトで地域産材を活用することが難しい状況になっている。

(三木委員長)

地域産材を建築物に利用する際、例えば構造（土台や柱など）に関わる部位に使うのか、意匠に関わる部位に使うのか、用途によって使いやすさも変わってくる。

テーマ③：（観光利用）

(香山委員)

実際には、観光に関する商品開発を観光業者と一緒に練っていくことになるか。山岳観光ではなく里山観光的なアプローチになるが、まず誰に相談してよいのかが難しい。

(三木委員長)

「どこに行っても木陰がある」という視点は観光面からも大切である。

(香山委員)

すでに今ある木陰スポットの発掘から始めてみても良いかもしれない。また、里山の登山ルートやガイドの整備なども取り組みとして上げられるのではないかな。

(渡辺委員)

森林浴ができる場所も観光資源として活用できるのではないかな。

テーマ④：市民の暮らしを支える森を守る

(香山委員)

このテーマは専門家的な視点になりがちでもあるので、市民に分かりやすい表現で伝える必

要がある。松枯れを止めることは難しいものの、松が枯れても森林はなくなるのではなく再生するということと、再生する場合どういった森林（必ずしも松林ではない）になるのか、市民が安心できるような形で伝えられると良い。

(環境アセスメントセンター)

森林所有者へのケアについても取り上げられればと思う。また、所有者が不明の場合、森林が荒廃することへの対応についても触れられればと思う。

テーマ⑤：森を知って、森を育てる

(香山委員)

学びたい市民は多いものの、その市民に対して教えられる人材が不足している現状がある。

(三木委員長)

学校現場で教えられる人材を確保したり養成することは、事実上とても難しい。学校以外に博物館などの施設の援助もないと、継続は難しいだろう。

(香山委員)

持続的に教えられる人材を養成する必要がある。

(小穴委員)

実施する学校に対して教育委員会等が認定するような制度の創出も、方法として考えられるのではないかな。

(三木委員長)

市内の中でも濃淡があり、フィールドへの近さにも関係するか。歩いて行ける距離にフィールドがあると、取り組みが定着しやすいかもしれない。

(環境アセスメントセンター)

何らかの相談窓口があると、市民の理解度も向上し取り組みも軌道に乗りやすいと思われる。

(2) フォーラムについて

(市)

調整の結果、場所は浅間温泉文化センターの多目的ホール、日時は6月22日(土) 13～16時とさせていただきたい。

(委員一同)

了解した。

(三木委員長)

内容についてはビジョン（案）の説明がメインになるが、それだけでは面白くないため、市民が実施してみたい森林イベントのプレゼン大会を実施してはどうかと考えている。一般市民のほか、次世代を担う高校生や大学生にも募集を掛けるとよいのではないだろうか。

（香山委員）

興味深いイベントの企画案が出てくれば、今年度のまつフォレイイベントとして位置づけ、市民が取り組みたい内容をビジョンの試験運用として実施できると良い。

（三木委員長）

ビジョン（案）については、説明 40 分、質疑応答 20 分程度か。残りをプレゼン大会とするような時間配分をイメージしている。1 人 5 分で 5～10 組程度か。プレゼン内容を模造紙に張り出して参加者に見てもらおうと、交流や議論も深まりやすいのではないだろうか。

（渡辺委員）

ビジョン（案）は、グループディスカッションより説明が主ということか。プレゼン大会は、休憩時間も活用して意見交換できるとより効果的ではないだろうか。

（環境アセスメントセンター）

今回の運営委員会の前に実施した正副委員長打合せでも同じ内容が検討されたが、ビジョンの骨格に関わる部分についてフォーラムで修正が生じた場合、この後の残り時間を考えるとあまり余裕がないため、適切ではないということになった。市民から意見を募るのであれば、イメージしやすく意見を出しやすいアクションプラン（取り組み内容）を対象にしたほうが適切かということでもとまっている。

（三木委員長）

フォーラムでは、市民が要望するアクションプランについて意見交換したほうが効果的と思われる。

（3）今後のスケジュールについて

（三木委員長）

来年度以降の取り組み体制について何かご意見はあるか。ビジョン策定後はこの運営委員会は役目を終え、市民の集まりである松本市森林再生市民会議として活動を推進していくイメージを持っている。会議の中心メンバーは市民で、林業事業者のようなプロは援助的な役割のほうが望ましいのではないだろうか。

（香山委員）

松本市森林再生市民会議とは別に、ビジョンを日々実践していくための窓口となる部署も必要ではないだろうか。それは市役所の部署とは別の形で、市民に開かれた常設の部署として設置し、いつでも市民が気軽に立ち寄って相談できるようなスタイルが望ましい。

例えば、「松本城三の丸エリアビジョン」は組織のモデル体制として参考になるかもしれない。プロジェクトを有する方々が会員として参加し、常設窓口を市でサポートして、その設置場所も市役所内ではなく街なかにある。森林ビジョンについても、こういった常設窓口を設置することで取り組みが日常化していくことが期待できる。

(三木委員長)

市民にとっての森林は、行政的に取り扱う森林とは全く別物であり、街づくり・教育・産業・観光など様々な要素を含めて森林再生していくことを考えると、市民を主体としてかなり横断的な形で組織を構築していかなければならないだろう。

(香山委員)

常設窓口の具体的な組織体制は、森林ビジョンの中にも書き込まなければ実現しないだろう。

(三木委員長)

フォーラムで発表する内容を事前に確認するため、5月下旬～6月上旬のフォーラム前に次回運営委員会を開催したほうがよいだろう。

(環境アセスメントセンター)

森林ビジョン作成に向けて、テキストではイメージが伝わりにくいため、イラストや画像などビジュアル的な要素も多く盛り込んでいきたいと考えている。特に画像については委員の皆様からのご協力もお願いしたいと考えており、画像共有フォルダを設置して周知させていただくので、是非ご提供をお願いしたい。

(委員一同)

了解した。